

# 一心寺かわら版

第五十八号 令和五年三月発行

持名山一心寺 検索

## 本土復帰五十周年を迎えた沖縄を訪れて

沖縄県は、令和四年に本土復帰五十周年を迎えました。この大きな節目にあたって、真宗教団連合（浄土真宗十派連合）で「沖縄に学ぶ！非戦と平和」という趣旨で沖縄を訪れました。これまで沖縄戦について、全くと言っていいほど知りませんでした。今回、現地で生の声を聞いて衝撃を受けました。

まず、浄土真宗本願寺派が二〇一七年に作成した映画「ドキュメンタリー沖縄戦」を視聴しました。当時の映像と戦争体験者のインタビューから構成されています。アメリカ軍は沖縄戦の様子を撮影しており、一部はカラー映像。日本でカラー映画が作成されるのはその六年後、これだけでも国力の差が見て取れます。

映像から戦争の恐ろしさが伝わってきます。砲撃などの戦闘シーンはもちろんのこと、重傷者や息絶えた人の姿も記録されており、その生々しさに目を背けたくなるほどでした。



太田隆文監督自身もメガホンを取るまで沖縄戦のことを詳しく知らなかったそうです。しかし、現地で詳しい事実を知り、過去のことではあるが、日本の未来のために広く伝えなければならぬと強く感じたそうです。沖縄戦は日本軍、アメリカ軍、本土住民、沖縄現地住民、それぞれの目線で異なった姿が見えてくるといいます。

沖縄戦の最も大きな悲劇の一つは「集団自決」でしょう。母親が子供を守るのは動物の本能のほうなのに、母が子を手にかけて自決。なぜこのような悲劇が起こってしまったのでしょうか。

見学したチビチリガマの悲劇は長らく語られませんでした。あまりに悲惨なできごとで、思い出してしまうえば多くの人が苦しむと考えられていたからです。知花昌一さんたちの調査によって、一九八〇年代になってようやく明らかになってきました。

艦砲射撃が始まった三月二十四日、多くの住民がガマに入りました。読谷村波平区の住民は二つのガマに分かれて避難しました。チビチリガマでは八十三名が自決、シムクガマは全員助かりました。集団自決のほとんどが米軍上陸の日に起こりました。米兵から「出てきなさい、殺さない、食糧もある」と呼びかけられますが、誰も出て行きません

村民には、皇民化、軍国主義、鬼畜米英が徹底的に教育されており、捕虜になれば男性は耳を削ぎ落とされて戦車に引かれ無惨に殺される、女性はいじくされて殺されると思い込んでいました。狂気の中で母が子を手にかけますが、多くはすぐには死に至りません。殺して、楽にしてという悲鳴で、まさに地獄の様相だったそうです。子どもに手をかけた後、自らは死に切れずに生き残った母親もおり、今も苦しんでいるといっています。

普段は立ち入り禁止のガマ(下写真)に入  
れていたいただきました。また遺骨が眠っているか  
もしれません。残された錆びついた鎌は自決  
に使われたものでしょうか。静かにお地蔵さ  
まに手を合わせ、その場を離れました。

「生きて辱しめを受けず」という教え、それ  
は捕虜になるなら自決せよということですよ。  
「集団自決」は正しくない、今は「強制集団  
死」と訂正されているそうです。

シムクガマでは、アメリカ帰りの日本人の説  
得、老人の「死ぬなら太陽の元で」という思い  
で、全員が外に出る決断をして助かったとい  
います。自決が起こったガマには従軍看護婦、元  
軍人がおり、自決を先導したそうです。

正しい情報を正しく理解し、正しい判断に  
よって行動しなければどのようなことがお  
こるのか、その大切さを教えられました。

実際にガマに入った上原美智子さん。兄弟  
で逃げ込んだガマで赤ちゃんが大泣きしま  
す。周囲の人々は「泣いたらアメリカ軍に見つ  
かるから出て行け」と怒鳴ります。仕方なく  
外に出て野宿しますが、赤ちゃんは次第に泣  
かなくなり、朝には冷たくなっていました。い  
つもは優しい近所の人々が赤ちゃんを死に追  
いやす。戦争は人間が人間でなくなる、恐ろし  
いものであると語ります。



ガマへ逃げる途中で出会った子供がいた  
そうです。お母さんがここで待ってと言  
ったけれども、不安だから一緒に連れて行  
つてと懇願されたそうです。しかし、ここを  
離れてお母さんと会えなくなっただけな  
いと思って、その場に置いていきました。結  
果、私は捕虜になって助かったけれども、あ  
の子はどうなっただろう、死んだのではな  
いかと後悔しました。しかし、年月を経て、  
その子は助かったと思うことにしたそう  
です。それで区切りをつけて前に進もうとい  
うことは守られるのではなく、巻き添えをく  
うこと、教育の恐ろしさ、大切さ、  
あるとのことでした。

沖縄戦は本土決戦の時間稼ぎ、長野県松代の地下壕に皇居、大本営を  
移設する計画にはまだ時間が必要でした。政府には、沖縄が陥落すること  
はわかっていたといいます。結果、沖縄県民一人あたり四七二発の弾薬が  
使われ、県民の死者は十二万人、内九万人が一般市民でした。

今、ロシアの侵攻に徹底抗戦しているウクライナは、ある意味、西欧諸国  
の盾になっており、当時の沖縄に重なって見えてきます。

もう一つの悲劇、集団疎開の学童を含め一七八八名が乗った対馬丸の  
撃沈。九死に一生を得た平良啓子さんのお話。当時小学四年生、学校で  
は天皇と天照大御神を拝まされた記憶がなく、真珠湾攻撃の成功をみ  
んなで手をたたき喜んだそうです。日々の生活すべてが天皇中心、ごはん  
を食べられるのも兵隊さんのおかげと教え込まれました。



疎開すると聞いて、本土に行けば電車に乗れる、雪があると楽しみだったそうです。一九四四年八月二十二日、対馬丸が撃沈されます。悲鳴とともに次々に海に飲み込まれていく人々。平さんは何とか樽につかまり海に浮かんでいました。そこに偶然、いとこの幸子さんが流されてきましたが、再会の喜びも束の間、あつという間に大波にさらわれて見えなくなっていました。

その後、幸運にも筏にたどり着きます。筏の奪い合いで二十人くらいが十人ほどに減りました。残ったのは男の赤ちゃん以外は全員女性。漂流中に小豆ごはんが流れてきました。隣のおばあちゃんが「あなたが食べなさい」とくれました。翌朝、そのおばあちゃんの姿はもう見えませんでした。大便をしている時に飛んできたトビウオを捕まえました。服を直している間に他の人に食べられて悔し涙を流しました。極限状態で人の優しさと浅ましさを体験しました。

そして、奄美大島近くの無人島に漂着。ようやく掘り当てた水を一緒に飲もうと声をかけた隣の女の子は目を開いたまま死んでいました。

その後、近くを通った船に救助され、奄美大島にたどり着きます。翌日、軍艦がやって来ました。対馬丸が撃沈された、日本軍が劣勢という事実を広めないように箝口令がしかれたそうです。

伏し目がちに話す平さんの表情から、今でもあの悲惨な体験が脳裏に焼き付いているのだと感じました。

映画の最後は、生き残った沖縄の人々がアメリカ軍から治療を受けたり、一緒に食事をしたたり、遊んだりしているシーン。「なぜ殺し合うことなく、仲良くできなかったのか」という宝田明さんのナレーションが響きました。

アメリカ軍が上陸した渡久地ビーチを訪れました。千五百隻の船で黒く埋まり、船が七割、海が三割という異様な光景。兵士が上官に報告に行ったところ、船は百隻か二百隻かと聞かれたといえます。日本軍はアメリカ軍の戦力を認識できていなかったのです。

見学中にオスプレイが上空を飛行しました。オスプレイは日本中どこを飛んでもいいのですが、アメリカ軍人家族の住宅上空は禁止だそうです。飛行モードとヘリモードの変更は基地内との約束なのですが、五機中三機は守つてない現実も知らされました。沖縄では本国でできない訓練ができるため、外来機（沖縄基地以外の航空機）が多く来るそうです。

米軍基地維持費、日本は七十五%、諸外国は四十%。思いやり予算三千億円、もとは円高のための経費増を補填するために五百億円程で予算化されたものがどんどん膨れ上がってきたとのこと。今後、同盟強靱化予算と名称変更され、毎年増額されるそうです。

基地問題はいのちの問題、生活環境の問題。嘉手納基地は夜間飛行の調査で、年間十人が健康被害で死亡するとの結果が出ているそうです。裁判では、保証は認められましたが、夜間飛行は禁止できませんでした。



米軍のことは日本には権限がない、第三者の立場であるとのことだったそうです。泡消火剤の成分による汚染など、他にも健康被害があります。



ガイドの沖縄平和ネットワーク・下地輝明さんは「戦争するのになくはならないものはないでしょう」と問いかけます。人、食糧、武器、軍隊、国、色々な返答がありました。答えは「敵」。全ての国と友好条約が結べれば戦争はおきない。今、日本は中国を始め敵を作っているのではないか、それが心配。琉球孤に自衛隊を九四三〇名配備、これまでなかった宮古島にも基地を作っている事実も知らされました。

最終日、魂魄の塔(下写真)にお参りしました。沖縄戦で亡くなった三万五千体の遺骨が収められています。地元住民が自ら遺骨を集めて作った、特別な思いが込められたものです。他に四十六の県が独自の慰霊塔を作っており、香川県(右下写真)は魂魄の塔の側にあり、各市町村名が彫られた石が祀られています。

現地の方は「南部の土は埋め立てに使うな」と言うそうです。激戦だった南部では、みんな骨も肉もちりぢりになって死んでいきました。遺骨は出て来なくても、この土はあの人が帰っていった土。どこで亡くなったかわからなくとも、あの人は



ここにいて思ってた手を合わす。六月二十三日には多くの人が「また会いにきたよ」と魂魄の塔にお参りされるのだそうです。

続いてお参りした平和記念公園の国立沖縄戦没者墓苑(左下写真)には、都道府県ごとに全ての沖縄戦犠牲者の名前が刻まれています。その一人一人に愛する家族がいて、今でも彼らに思いを寄せている。現地を訪れて戦争体験者から話を聞かせていただき、彼らの戦争は終わっていないのだと感じました。

今回、沖縄について多くのことを学び、無知だったことを反省しました。私たちはメディアから情報を得ることが多いですが、それで現実を知っていると云えるのでしょうか。いつ何が起ったのか、何人の死傷者が出たのかは知っていますが、現実がどれほど悲惨かを想像できていますでしょうか。本当のことを知ること、過去を学ぶことが未来をより良くするため大切にできるとおっしゃったガイド、戦争体験者の方々のことばを再び胸に刻み、沖縄を後にしました。

### 報恩講報告

今回も時間短縮の法要、親鸞聖人ご誕生八五十年慶讃法要テーマ「今こそお念仏一つなごうふれあいの輪」についてお話させていただきました。光栄なことに、四月二十日には本山興正寺で御堂法話を担当させていただきました。

